

はじめに

二〇五三年には日本の人口は、一億人を切り、二〇六五年には八千八百万人まで減少するという。一億人超を前提にして考えてきた社会経済政策は練り直さなければならなくなるだろう。そして年齢構成その内訳を見るなら、六五歳からとされる高齢者の人口数は、一九歳までの未成年の人口数を、すでに越えて多くなっている。この勢いで推移するなら、二〇歳から六四歳までの成年生産者人口数をも超えていくことになる(図)。

二〇一五年のドイツを見れば、シリアからの難民百万人を受け入れた。北朝鮮の政権はそう長くないうちに崩壊することもある。そういうことにもなったら二百万人を超える難民が日本海を渡って日本に来るといふ話もある。そのとき、日本人は、受け入れるのだろうか。それとも世界の受け入れ国への窓口に徹するのだろうか。

少子高齢化が深刻な人口減少、生産構造に影響を与えるだろうと、一九九〇年代にはすでに言われていながら、二一世紀も五分の一が過ぎようとしている。深刻だと口にしながら、目先の景気動向さえ良ければということで今が過ぎていく。

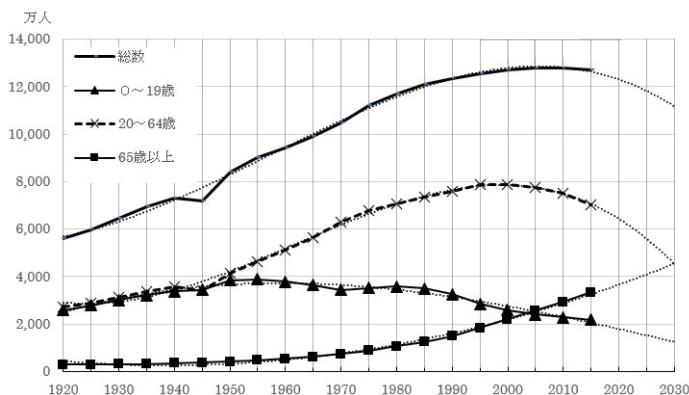


図 未成年、生産、老齢人口推移 1920-2030

少子高齢化と言いながら、都市部では、幼稚園、保育園、こども園などへの入所がかなわない待機児童が問題となっている。この国は、いったい計画や統治がされてきたことがあるのだろうか。目先の景気動向さえよければということ、これからもやっていくのだろうか。

超高齢化社会と言われ、認知症患者は四百万人を超え、二〇年のうちには七百万人にもなるといふ。後期高齢者医療保険制度も、そして介護保険制度も、これから、どのように維持できるのかも実は深刻な問題のはずだが、目下のところ、受給当事者ではない人たちには、実はどうでもよいことで、それよりは直前の景気動向の方が重要なのだろう。

国民基礎年金は、二〇歳以上の日本人は、等しく一万六千円にもなる掛け金を毎月拠出せねばならない。滞納者には、税金同様に、強制差し押さえも実施しようという時代にもなっている。

ベーシックインカムというアイデアがあり、ドイツをはじめヨーロッパの社会民主主義とキリスト教の根付いていた国々では、現実味を帯びる議論がされている。要するに、すべての国民に、例えば年三百万円を給付するという制度。働いても働かなくとも、この基礎所得は生後間もない子どもから年老いて死ぬまで誰にも保証される。労働と収入との、近代産業社会における関係をご破算にして、生活をするとは、国が保証するというアイデアである。

ドイツをはじめ消費税の税率がすでに高率になっているところでは、消費税をさらに引き上げて、これを原資とする。あるいは、所得税も組み合わせ、富裕層は基礎所得の給付を受けるが、同時にそれ以上の納税もする。

現状、保険料を拠出するが、同時に高額分の還付も受ける。掛金を拠出していくが、老後、年金の給付を受ける。生活保護を受給している場合もある。富裕層は、納税額が多いが、確定申告により還付を受けることもある。こうした拠出と還付の終わりのない連鎖を断ち切り、ここにかかる事務機構も整理していけば、もっと効率的な社会制度を構築していくことができるのではないかというアイデアでもある。

しかしながら、日本では、大規模な移民受け入れ政策が断行されることが、まずありえないのと同じように、こうしたベーシックインカムのような制度は、学者がせいぜいヨーロッパの先進例として紹介する程度で終わり、真面目に導入しようなどと議論されることはない。まずは、

五八万四千人という膨大な官僚機構とそのもとで最も安定した生活を送る国家・地方合わせて三三〇万人を超える膨大な数の公務員は受け入れないであろうし、優良な企業とされるところほど、直近の景気動向にのみ関心が向いていて、こうしたユートピアには関心はまったくくない。

どうしてだろうか。たぶん二つ考えられる。ひとつは、「勤労」ということ。今ひとつは、「統治する」そして「統治される」ということ。この二つに、日本人は徹底的に呪縛されてきた。ここから自由になれないままに、二〇六五年には八千八百万人となり、二一〇〇年には、二千万人台の国となり、そのうち一千八百万人が七五歳以上の後期高齢者である可能性はある。

本書ではそうした日本という深刻な未来社会について、かかる「勤労」と「統治」をめぐる、理論社会学から湧出してくるロジックを動員して論じていく。その際、重要な概念となるのは、媒体「貨幣」と「権力」、そして媒体「身体」と「言語」である。これら諸媒体についての基本概念を踏まえながら、未来を見透すことができることが、社会学をするということに他ならない。

目次

第1部 理論社会学の基本概念 3

一、媒体「身体」と時空 4

二、社会的諸世界の分節 7

三、媒体「言語」と「人」 16

四、老化、寿命、代替 23

第2部 「勤労」の帰結——人生の同一性 27

一、長寿というリスク 28

二、死への形而上学——没宗教性の宗教性 50

三、「労働の意味」——マルクスとウェーバーの予言 63

四、「完全雇用」という短期期待——ケインズの着想 75

第3部 「統治」の帰結——社会の同一性 99

一、	ホッブス問題とは何か？——言論と討議の国家神学	100
二、	システム統合と社会統合	123
三、	仮想時空の自由化と再封建化	150
四、	民主政と国家神学	165

詳細目次／未来社会学序説 勤労と統治を超える

はじめに i

第1部 理論社会学の基本概念 3

一、媒体「身体」と時空 4

二、社会的諸世界の分節 7

1. 同時性と疑似同時性 7

2. 遠近の分節 9

3. 媒体「光」と「音」 11

4. 現在、過去、未来 12

5. 対面と観察 14

三、媒体「言語」と「人」 16

1. 言語行為——再説と拡張	16
2. 仮想時空「社会の社会」のリアル	22
四、老化、寿命、代替	23

第2部 「勤労」の帰結——人生の同一性

一、長寿というリスク	28
1. 逝くまでの世界——ある事例	28
2. 逝くまでの諸類型	34
3. ケアという行為の存立	38
4. 老後の貯え——年金、退職金、保険	43
5. 世代分裂の主因——リースマン再考	46
二、死への形而上学——没宗教性の宗教性	50
1. 「死」の定義——時空の虚無と横断	50

- 2. 終わりまでの終わらなき日常 53
- 3. 霊的世界の始末 57
- 4. 「孤独死」のリアル 59

三、「労働の意味」——マルクスとウエーバーの予言……………63

- 1. 「勤労」の機軸 63
- 2. 仕事と人生——疎外された労働 66
- 3. 労働価値説 68
- 4. 人生の資本主義的設計——人の現出 71

四、「完全雇用」という短期期待——ケインズの着想……………75

- 1. 有効需要が不足するとは——非自発的失業への処方 75
- 2. 流動性選好のナショナルな前提 80
- 3. 貯蓄と投資の世代意味論 85

第3部 「統治」の帰結——社会の同一性……………99

一、ホッブズ問題とは何か？——言論と討議の国家神学 100

1. コズミオン——フエーゲリンの着想 101

2. ホッブズ秩序の起源 104

3. 「人」の現出と代表——モナド共同体から社会的世界へ 107

4. 分節の機軸——同時世界の分節 111

5. 機軸の揮発——代表と媒体の同時進化 116

(ア) 代表性の消失 120

(イ) 理性主体の消失 121

二、システム統合と社会統合…………… 123

1. 「貨幣・権力」対「言語・討議」——ハーバマスの提案 123

2. 経済、市場、秩序 125

3. 貨幣が媒介する非相称性と権力 128

4. 銀行という特異存在 133

5. システム統治という裁量主義 139

三、仮想時空の自由化と再封建化…………… 150

四、民主政と国家神学

..... 165

1. ハイエク「貨幣発行自由化論」の先見性 150
2. P 2 P の本質 154
3. サトシ・ナカモトの革命理論 157
4. 仮想時空の再封建化——A I 社会のエルフルト綱領 161
- (ア)「貨幣の機能」について 162
- (イ)「貨幣の保持動機」について 164
1. ベラー「市民宗教」——パーソンズ一九六〇年の分析 165
2. ホッブス秩序の含意 170
3. 民主政と選ばれし人 172
4. 美人投票のための討議——言論と学問の衰亡 174

結び

..... 187

文献一覧 199

事項索引 202

人名索引 204

未来社会学 序説

勤労と統治を超える

著者紹介

森 元孝 (もり・もとたか)

■経歴

社会学者、博士 (文学)

1955 年生まれ。現在、早稲田大学文化構想学部社会構築論系教授

<http://www.f.waseda.jp/wienmoto/>

■編著書

- 1995 年 『アルフレート・シュッツのウィーン——社会科学の自由主義
的転換の構想とその時代』新評論。
『モダンを問う——社会学の批判的系譜と手法』弘文堂。
- 1996 年 『逗子の市民運動——池子米軍住宅建設反対運動と民主主義
の研究』御茶の水書房。
- 2000 年 『アルフレッド・シュッツ——主観的時間と社会的空間』東信堂。
- 2006 年 『フリードリヒ・フォン・ハイエクのウィーン——ネオ・
リベラリズムとその時代』新評論。
- 2007 年 『貨幣の社会学——経済社会学への招待』東信堂
- 2014 年 『理論社会学——社会構築のための媒体と論理』東信堂
- 2015 年 『石原慎太郎の社会現象学——亀裂の弁証法』東信堂
- 2016 年 『石原慎太郎とは？——戦士か、文士か』東信堂

未来社会学 序説——勤労と統治を超える

2018年1月31日 初版 第1刷発行

〔検印省略〕

定価はカバーに表示してあります。

著者©森 元孝／発行者 下田 勝司

印刷・製本／中央精版印刷

東京都文京区向丘 1-20-6 郵便振替 00110-6-37828

〒113-0023 TEL (03) 3818-5521 FAX (03) 3818-5514

発行所
株式 東信堂

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO., LTD.

1-20-6, Mukougaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan

E-mail : tk203444@fsinet.or.jp <http://www.toshindo-pub.com>

ISBN978-4-7989-1469-5 C3036 © Mototaka Mori